



2022 年度第 6 回理事会



議 事 録

  


一般社団法人 日本クレ一射撃協会

## 2022年度 第6回理事会

### 議 事 録

1. 日 時 2022年12月6日(火) 13時00分～
2. 場 所 JAPAN・SPORT・OLYMPIC・SQUARE 3階 会議室8
3. 出席者 出席理事17名、出席監事3名
- |      |        |         |                |
|------|--------|---------|----------------|
| 会 長  | 不老 安正  | (福 岡)   |                |
| 副会長  | 夏樹 陽子  | ( 一 )   |                |
| 専務理事 | 畔蒜 均   | (千 葉)   |                |
| 常務理事 | 渡辺 久雄  | (栃 木)   | * 競技委員長        |
| "    | 柏木 孝則  | (三 重)   | * 審査委員長        |
| "    | 梅津 宣弘  | (福 島)   | * 強化委員長        |
| "    | 中園 功一  | (鹿 児 島) |                |
| "    | 谷本 歩実  | ( 一 )   | * アスリート委員長     |
| 理 事  | 菊本 哲也  | (東 京)   | * 総務担当理事       |
| "    | 岩尾 美和子 | (和歌山)   | * アンチドーピング担当理事 |
| "    | 清水 光一  | (本 部)   | * NTC 担当理事     |
| "    | 本山 浩一郎 | (神奈川)   |                |
| "    | 丸石 博   | (島 根)   |                |
| "    | 本戸 歳知  | (埼 玉)   |                |
| "    | 小川 晶子  | ( 一 )   |                |
| "    | 小高 左起子 | ( 一 )   |                |
| "    | 小園 浩己  | (芸 文)   |                |
| 監 事  | 相馬 正   | (青 森)   |                |
| "    | 瀧根 隆幸  | (富 山)   |                |
| "    | 藤沼 弘文  | (岩 手)   | WEB            |

(欠席理事) 江野澤吉克、橋本聖子

4. 陪 席 坂本 強 (事務局長)  
大江 直之 (事務局アドバイザー)  
永島 宏泰 (事務局・強化本部長)  
篠原 将門 (事務局・強化本部次長)
- 小松 裕 (JOC・JADA) WEB

5. 理事会定足数確認

本理事会の定足数について、理事総数19名中17名の出席となり、定款第43条の規定により過半数以上の理事が出席しているため成立したことを事務局よ

り報告。なお、監事については監事 3 名全員が出席。

6. 議事録署名人確認及び開会挨拶

事務局より、定款第 42 条に基づき不老会長が本理事会の議長を務める旨説明。議長より、本理事会の議事の経過を議事録とし議事録署名人については、定款第 47 条に基づき、議長と出席している監事 3 名となる旨説明があり、審議に先立ち出席理事各位に対し、挨拶と議事進行に際しての協力依頼があった。

7. 冒頭審議

議長より事務局の一時退席を求め、事務局退席後、出席理事・監事へ次の通り説明。

当協会は現在、公益法人への移行手続きを進めているが、その中でガバナンスコード上、クリアしなければならない問題があり、今後これを是正していく必要がある。そのため、各位へ説明しお諮りさせていただきたい。

まず、公益法人に移行しないと JSPO 加盟団体の要件から外れるため、国民スポーツ大会（国体）へ参加できなくなってしまう。公益法人への移行にあたり必要なことはスポーツ庁や上部団体が定めたガバナンスコードを遵守しながら協会運営をしなければならない点だ。最近においても他競技 NF において様々な不祥事があり、助成金の減額や支給停止等が報道されている通り、ガバナンスコードを遵守できない NF は罰則処分が上部団体により下されるようになっていく。

当協会の公益法人移行にあたり、2020 東京五輪や JOC で担当弁護士を務められた弁護士より、早急に改善の必要があることを指摘されている。理事各位におかれては、過去の理事会で賛同いただいた案件や、法律上、場合によっては協会の損害を負担する義務があることを踏まえて審議いただく必要がある。先日行われた JOC 加盟団体会長会議においても、アスリートに対する公平な強化規定整備やガバナンスコード遵守の重要性について、JOC 山下会長より説明を受けたばかりだ。弁護士からも、経緯の見えない選手選考と見做される可能性の指摘があり、早急に理事会で再審議する必要がある旨を進言されている。まずは 1：公認装弾検定料について、2：COMPAK 日本導入について、3：後援企業会からの資金援助について、4：強化に関する規定等の整備について、審議願いたい。

この 4 点に対応するため、協会の予算編成・執行に関する全ての権限は理事会が有すること、理事・担当弁護士を含む特別委員会を編成すること、現在予算執行中の事業について不適切な点がある場合は、理事会において直ちに適切な処置を講じることについて各位にお諮りしたい。

（\*一部、清水理事が補足説明）

採決方法は無記名による投票形式としたい。投票用紙を回すので、私の提案に賛同いただける場合は○、賛同できない場合は×を記入し、投票箱へ投函いただきたい。賛成多数の場合は高橋義博名誉会長より名誉会長職を辞する旨の文書が理事会へ届けられていることを報告する。

..... 投 票 .....

開票作業を監事が務め、瀧根監事より理事 17 名が議長提案に全員賛成であった旨が報告された。

## 8. 報告事項

### ※事務局員入室

理事会へ初めて出席した小藺理事の紹介と本人より挨拶があった

### (1) 競技委員会・審査委員会報告

坂本事務局長より配布資料に添って報告説明。

#### ◇全日本選手権大会（福岡）

（財）福岡県スポーツ推進基金がライブ配信を実施、非常に好評であった。開会式には橋本副会長も参加、激励挨拶をいただいた。優勝者はトラップ種目：大山重隆（埼玉）、スキート種目：脇屋昂（佐賀）。女子選手権もライブ配信を行った。優勝者はトラップ種目：小島千恵美（群馬）、スキート種目：折原梨花（栃木）。

#### ◇ビギナーズ・マッチ大会及びグランド・マスター大会（伊勢原）

ビギナーズ・マッチは TS 計 69 名が参加、トラップ種目：笹子智弘（千葉）、スキート種目：安東航（福岡）が優勝。

グランド・マスターは TS 計 64 名が参加、トラップ種目：高橋清（神奈川）、スキート種目：青木豊（群馬）が優勝。抽選会ではアスリート委員長谷本理事にプレゼンターを務めていただいた。

#### ◇COMPAK タイ派遣（\* 柏木委員長から説明）

タイで COMPAK・SPORTING 選手権が行われ、審査委員長柏木孝則、競技副委員長佐藤堅司の 2 名が参加。FITASC レフェリー講習会・試験を受け、大会のレフェリーも務めた。

大会は 11 月 15～20 日まで、タイのラフチャブリー市にあるファサラム射撃場で行われた。FITASC とは、ISSF とは別の国際組織であり、1921 年に設立されている。FITASC は ISSF とは違い、より遊びの要素が強い競技種目を行う団体であり、そのため、会員数も ISSF よりはるかに多く、大会も年間 35 大会が世界中で行われている。

とりわけヨーロッパが盛んだが、アメリカ、オセアニア、南アフリカ、アジアと全ての大陸で大会が実施されている。特に近年、アジアではタイがこの競技に傾注しており、今回の日本への呼び掛けもその影響と思われる。

今回の講習会受講者は、アメリカ、アイルランド、ドイツ、フィリピン、ベトナム、タイ、そして日本からの参加があった。FITASC 会長、フランス人ファリンカス氏も参加され、講師はイギリス人でベテランのヒュー氏が務めた。

受講者は皆、英語堪能で我々 2 名はとても苦労した。講習で使われる資料も講義も全て英語で行われた。

SPORTING 種目は 2 日間のルール講習後、筆記試験。翌 3 日目から COMPAK

種目の講習をまた2日間受け筆記試験と、日程的に過密な講習だった。その後、4日間、実際の大会で実技試験を兼ねて審判を務めた。

クレー放出の順番、複雑な操作も全てレフェリーが行うために大変な作業だ。無事我々2名は筆記・実技とも合格、FITASC 会長ファリカス氏、FITASC アジア会長ブナン氏から、日本の選手・役員の参加を期待していると伺った。日本国内ではまだ法的関係がクリアしていないため、競技実施は暫らくできないが、選手・役員の派遣については今後検討していく必要を感じた。

#### ◇青森国体・弘前射撃場視察

去る10月28日、2026年第80回青森国体会場となる弘前クレー射撃場へ渡辺競技委員長、坂本事務局長が訪問。青森県や弘前市担当者、青森県クレー射撃協会相馬会長らと打合せを行った。

弘前クレー射撃場は民間施設であるため、県が出せる予算が厳しいとの説明を受け、妥協できるところは妥協願いたいと要望があったが、NFとして譲れない線はご理解いただきたいということで話はまとまったと理解している。

JSCO 正規視察時は JCSA ルール実施を下に視察したが、今年から国体は ISSF ルールへ戻し、トラップは放出距離が76mになった。我々の JSCO に対する説明が未実施で配慮が足りないところがあったため、先日、JSCO 国体担当者へ資料を持参し説明したところである。

#### 相馬監事より補足説明。

10月の競技委員長・事務局長視察時は一切触れなかったが、8月に地元で大雨が降り、スキート射面側の崖が一部崩れた。崩れた所からクレー標的の残渣（ざんさ）が見つかり、そのクレー標的の残渣が見つかった箇所の下流にリンゴ畑農家が居る。そのため、環境に影響がないか調査をする必要があるため、国体に向けた作業を一時中止するという電話が昨日12月5日、県行政から電話があった。

当地は豪雪地帯であるため、射撃場は11月から閉場。調査は来年春頃になり、調査の結果が問題ないことを確認して作業を再開する旨の説明だった。そのため、リハーサル大会の実施は考えないでほしい、本国体については、その調査の結果次第。2026年国体というより射撃場の存続自体が不明。

県に対しては、見つかったクレー標的の残渣量は大した物量ではなく、2トントラック1台分も無い程度。従って、故意に埋めたものではない。射撃場で適正に産廃処理マニフェストを全て県へ提出するので大袈裟にしないしてほしいとお願いしていた。

昨日の電話ではとにかく県環境部が調査を実施する、という回答だった。競技委員長方々が訪問した時は良い雰囲気だったが残念だ。

#### 渡辺競技委員長より補足説明。

10月視察時は和やかな雰囲気、指摘事項は全て回収すると県は約束してくれて安心して帰ってきたが残念だ。

## (2) 強化委員会報告

永島強化本部長より報告説明。

### ◇世界選手権大会（クロアチア）

時差があるため早めに現地入り。ホテル付近のスポーツジムで体調管理を行った。大会会場のアスリートラウンジはかなり人が密集しており、十分なコロナ対策が取られていなかったため、大型レンタカーを借り、待機・休憩対応を取った。

スコアは116点、122名中69位。今回はパリ五輪のQPが4つ付いていたが全く届かない競技結果だった。

世界選手権のファイナルで柏木常務理事がレフェリーを務めた。恐らく日本人が世界選手権のファイナル・主レフェリーを務めることは協会初であろう。

### ◇海外合宿（アゼルバイジャン）

10月19日～11月16日まで、アゼルバイジャン及びドイツへ強化指定選手戸口翔太郎の海外合宿を実施した。アゼルバイジャンは来年、4年に一度のクレール・ライフル・ピストル全種目の世界選手権が予定されており、同大会にてスキート男子種目のパリ五輪QPが4つ付与される。

また、アゼルバイジャンには2020東京五輪選手の面倒を見てもらったエミンコーチが居るため、彼の指導を受けるためでもあった。

また、近年、ドイツ国内にナショナルトレーニングセンターがリニューアルし、将来の欧州遠征の拠点として活用できるか視察を行った。

アゼルバイジャンではナショナルチームと合同練習をしながら、エミンコーチより個人指導。ウォーミングアップの重要性を指摘されたり、射面の射撃練習でも1枚抜く毎に射撃を中断し、何故ミスしたかを徹底的にコーチ・選手間で話し合う。そのため、1日の消費弾数は100～250発程度、練習は量では無く質であることを強調された。

また、オリンピック常連選手は独自のルーティンを皆持っているが、戸口選手にはルーティンが無いことを指摘され、今後、彼独自のルーティンを確認し守りながら射撃する重要性を学んだ。

その他、射台上に不安定なマットを置き、その上で射撃するトレーニング。これは体幹・バランスを鍛えることとクレール標的に対する執着心を養う。

（\*日本では法令上に無理がある）

アゼルバイジャンチームにはナショナルチーム専属のトレーナーやマッサージャーが居る。彼らに戸口選手の筋力チェックをしてもらいながら、マッサージ前の射撃とマッサージ後の射撃の比較も行なった。

その他、ジムでフィジカルトレーニングやプールでのトレーニング。水泳は筋肉を和らげる効果や体幹トレーニングに適している。ホテルの会議室を利用し、橋本副会長から紹介いただいたJISSとオンラインミーティングを行い、今後のトレーニングの方針確認など有意義な時間を過ごすことができた。

アゼルバイジャンでは戸口選手と同レベルの選手をわざわざ3人揃えても

らい、一緒に合同練習を行った。1人で撃つよりも複数の方が楽しく、且つ、射撃に集中できたと感じている。たまたまローカル試合があったため、エミンコーチの勧めもあり合宿の総仕上げとして戸口選手も試合参加。スコアはあまり良くなかったが銅メダルを獲得した。

ドイツではエミンコーチよりハードトレーニング後のため休養を入れるよう指示があり、射撃場へ行かず、ドイツオリンピック委員会が指定している病院へ向かった。

ドイツナショナルチームがアスリートチェック（メディカル）を行っていたので、戸口選手も測定してもらった。データは後日日本へ送ってくれるので、JISSとデータを共有する予定である。

翌日、ドイツNTC内のトレーニングジムで体力測定を行った。この体力測定にはドイツのナショナルチームとジュニアチームが全員参加。戸口選手とのデータ比較ではドイツ選手の筋力が100とすれば戸口選手は70～80であった。具体的な数値差を把握でき、今後の筋力トレーニングに活かしていきたい。

また、帰国後の11月18～20日、福岡で実施した学生育成合宿において、アゼルバイジャンで経験したプールを使ったトレーニングを実施した。学生選手は和気あいあいとトレーニングを行っていた。エミンコーチから教わった効果的な練習方法を現場で積極的に実施していきたい。

続けて、ISSF総会についても報告する。

総会会場であるエジプトへ、不老会長、柏木常務理事、通訳としてブローカンプ千恵美氏と私の4人で出席。

総会前日の11月29日、ASC打合せ会議だったがISSFリシン会長、ラトナー事務総長も同席。ASC会議へISSF会長・事務総長が同席するのは異例だが、自分たちが行った4年間の活動を通じて改善できた内容についてプレゼンがあった。明日の総会では会長選挙があるため、自分へ票を投じてほしいアピールだったと考えている。

総会当日、会場へIDカードの無い人は一切入れないという異例のセキュリティの高さだった。会長選挙の結果は僅差だったが、イタリアのロッシ氏が新会長に選ばれた。また、新事務総長はドイツのウイリー氏が選ばれ、良く知る人物でもあり今後の日本にとってはプラスになる結果と評価している。その他、副会長へキンバリー氏（アメリカ）が選ばれ、彼女はスキート女子種目・ダブルトラップ女子種目のメダリスト。彼女は元々ISSFアスリート委員長であった。新アスリート委員長にはブラジルのライフル男子選手カシオ氏が選ばれた。当協会も今後ISSFアスリート委員会と連携を取り、将来的にはオンライン会議などできるようにしていきたい。副会長に選ばれたキンバリー氏は多忙な方だが、将来、日本の女子スキート選手のコーチングが実現できれば嬉しい。

また、ISSFリシン会長より、投票前に、不老会長へ2020東京五輪開催に協力した特別賞として記念プレートをいただいた。

### (3) 総務報告

大江事務局アドバイザーより報告説明。

#### ◇公益移行報告

前回理事会終了後、去る10月17日に公益認定等委員会へ法人移行の電子申請を提出・受領された。

同委員会は現在、法人立入り検査や公益法人から提出された事業報告書のチェック等で多忙であり、11月21日から審査員へレクを始めると伺っている。現在法人移行の審査中であるが、当協会としては来年4月1日から新法人へ移行したい旨は事前相談時から申し伝えているため、特に問題無ければ、4月から公益法人としてスタートできる予定。

#### ◇JSC・令和4年度実態調査

去る11月7日、定期的なJSC実態調査を受けた。

調査では、全日本選手権大会：基金事業、新しい生活様式での選手強化活動事業：JOC事業（以下、新生活様式事業という）の2事業が数ある事業の中からピックアップされ、調査を受けた。

新生活様式事業では、見積書の添付が無かったこと、他社との相見積り経緯が無かったために、必ず今後は行うように指摘された。新生活様式事業は、梅津強化委員長が専門業者と取得したいデータの計測方法や専用機具など、Q&Aを重ねながら進めたために他社との相見積りができなかった旨をJSC担当者へ説明した。

また、1回の取引が100万円を超える場合は契約書を今後必ず作成するよう申し付けられたため、後日、JSCから当協会宛て書面が届き、今後の改善策について理事会決議を経て提出することが義務付けられている。

基金事業では、全日本選手権大会の会場が伊勢原射撃場であり、同射撃場の指定管理者を当時会長だった高橋義博氏が務めていたことについて幾つか質問があった。

同射撃場の利用について理事会決議を経ているか、利益相反ポリシーはどうなっているか、ということを探ねられ、全日本選手権大会を含み当協会の主要大会の会場・日程は全て理事会決定を経ていること、利益相反ポリシーはガバナンスコード自己公表で本年度中に整備することとしており、既に原案が出来上がり、次回の理事会へ上程される予定である旨を回答した。同ポリシーは本日の理事会の審議事項へ挙げられている。

実態調査に立ち会ったJSC税理士より、利益相反ポリシーの理事会承認を経た後、同ポリシーに従って利益相反を適切に管理していくよう指導された。

#### ◇ISSF 総会

先ほど不老会長や永島強化本部長より説明があったため詳細は割愛するが、会長選挙は137対127という僅差でロッシ氏が新会長へ選ばれた。また、執行理事に日本ライフル射撃協会の松丸会長が選ばれ、日本にとっては喜ばしい結果となった。

◇JOC 加盟団体会長会議

先ほど不老会長より説明があったが、去る 11 月 16 日、JOC 加盟団体会長会議が実施された。札幌オリンピック招致や 2025 年デフリンピック東京開催について説明があった。

デフリンピックとは聾啞（ろうあ）アスリートを対象とした大会であり、クレー射撃競技は現在、実施種目に含まれていない。

◇読売日本スポーツ賞

読売日本スポーツ賞の候補者推薦依頼が本部事務局に届き、本年度は国際大会における入賞等の実績が無かったため、強化委員会の意見も聞きながら本部事務局内で協議し、今回はスキート種目：脇屋昴選手を推薦した。

推薦理由としては、当協会の主要 8 大会中 6 回優勝、締め括りとなる全日本選手権も優勝し、本年度は彼の活躍の年だったため。

来る 1 月 23 日、表彰式が都内ホテルで実施され、『読売新聞』紙面でも取り上げられる。

不老会長より補足説明。

報告説明があった利益相反ポリシーは、しっかりとした内容で策定し、適切に管理していく必要があり、違反があれば罰則対象となることをご理解願いたい。

9. 審議事項

(1) クレー射撃フェスティバルの国体出場回数計上について（継続審議）

渡辺競技委員長より議案説明。

前回理事会で議題として挙げられ、選手等の意見をもう少し聴取したいと考え、継続審議とさせてもらった。

他競技と違いクレー射撃競技は、銃刀法の都合上、成人後に所持が可能となり、その後練習を経て国体選手に選ばれるときには年齢を経てしまう。競技役員としても選ばれるまでに豊富な知識・経験が必要となる。フェスティバル大会は国体隔年開催に伴う国体代替大会であり、国体に向けた選手のモチベーション維持、競技会運営能力の維持を目的としている観点から、フェスティバル大会への参加を国体表彰の対象としてカウントすることに賛同いただきたい。

議長より、過去、JSPO から処分を受けていた時期に実施された都道府県対抗大会も国体表彰の出場回数に認められていた経緯がある旨を補足説明。

菊本理事より、認められた場合、いつの大会から対象となるのかと質問があり、本年度のフェスティバル栃木大会から OK としたい旨、渡辺競技委員長が回答。

質疑応答後、投票によるも採決方法が用いられ、理事全員賛成で競技委員会提案が承認された。

（\* 投票前に小川晶子理事、小園浩己理事が退席）

(2) 利益相反ポリシーについて

大江事務局アドバイザーより配布資料に添って議案説明。

他競技団体が既に作成・整備している利益相反ポリシーを模範として原案を作成した。原案は同ポリシーの目的、対象者、基本原則、違反行為の定義、対応・取組みについて構成。

利益相反の管理体制はコンプライアンス委員会が行い、利益相反行為の適正性の判断基準、自己申告、当協会関係者に対する特別の利益の供与の禁止を記載した。これは公益認定法でも記載があるために重要である。

続いて、利益相反に関する審査、審査結果に対する不服申立て、同ポリシーを改廃するときは理事会決議、という全 11 項目で整理した。

利益相反ポリシーはガバナンスコードで策定することが義務付けられており、当協会は自己公表において 2022 年度内に整備予定と回答している。

また、本日初めて内容を拝見する方も居られるので、本日は提出した原案を持ち帰りいただき、質問、或は追加・修正などの提案等あれば次回の理事会において取り纏め、再度ご審議願いたい。

議長より補足説明。

本ポリシーは今後の協会運営上重要となるため、事務局の説明通り、原案を良く精査いただき、次回の理事会において各位のご意見等々をしっかりと賜りたい。そのため、本日は「継続審議」とさせていただく。

(3) ワールドカップ等派遣予選会

議長より議案について説明。

ワールドカップ等派遣予選会については本理事会で審議予定であったが、冒頭審議により、強化に関する規定等の整備について、理事・担当弁護士を含む特別委員会を編成することを決めたため、特別委員会において審議されるまで予選会は行わないことが適宜と考える。但し、早急に見直し等が必要なため、12 月中に特別委員会実施したい。梅津強化委員長、NTC 担当理事の清水氏が中心となり、日程等を設定してもらいたい。

なお、現行の強化指定選手 1 名の海外派遣については特別委員会における方針が固まるまで現状通りとしたい。

柏木常務理事より、強化委員長と清水理事で予選会の計画を立ててもらおう。原案を理事会へ提出いただくという理解で良いかと質問があり、議長よりその予定である旨説明。

永島強化本部長より意見。

国際大会は 2 ヶ月前～1 ヶ月前にエントリー手続をしなければならない。来年度 4 月以降なのか、3 月 WC とするのか、2 月クウエートアジアカップとするのか、選手は大会に向けて当然調整に入るため、しっかり議論願いたい。

パリ五輪 QP は 8 月実施の世界選手権 (AZE) まで付与されない。

本戸理事より質問。

スキート種目では戸口選手が頑張っているが、何故、トラップ種目選手は育たないのか。クレー射撃はトラップ・スキートの両輪がある。基準点（120/125点）をクリアできそうな選手がトラップ種目には居ないのか。

梅津強化委員長より説明。

現在、学生選手で頑張っているのは宮坂七海選手。全体では今回の全日本選手権で分かるように、2020東京五輪代表だった大山重隆選手であろう。

その他選手は概ね115/125点前後であり、トラップ種目では育っていない現状。スキート種目では戸口選手の他、脇屋昴選手が安定した成績を残している。トラップ種目では、練習中でも切磋琢磨し、ライバル意識を持って向かう意識の向上がまだ見受けられない現状。

「オリンピックを目指す」という言葉を口にするのは簡単だが、その壁は並大抵のものではない。例えば、全日本選手権の予選が125個撃ちならば、常に120点を超えて122～123点ぐらい撃たない、ワールドカップや世界選手権で決勝に残れない。オリンピックに出ても優秀な成績を残せない。国内の通常練習で100枚撃って常に97～98点を撃てるような状況じゃないと世界に行って通用しない。

不老会長が現役時代、88年ソウル五輪に日本代表で参加されているが、当時のアベレージは常に97～98点だった。そのぐらい撃たないと国内選考で勝てなかった時代だ。戸口選手は頑張っているものの、出場した世界大会では大体10位前後に留まっている。如何にスコアアップできるかが課題であり、大事なことは取り巻く環境と考えている。1人2人で練習するのではなく、大勢の中で切磋琢磨し争いながら撃っていくことが理想。橋本副会長に紹介いただいたJISSを使い、射撃に必要な筋力・射撃フォームの分析等を行って課題であるスコアアップへ繋げたい。トラップではその状況にも届いていないのが現状。

議長が議場に諮り、予選会を含む今後の強化活動方針は特別委員会で原案を策定することとなった。

#### (4) その他

##### ◇COMPAKについて

菊本理事より、COMPAKの使用銃について銃身が66cm（26インチ）を超えないものと配布資料に表記があるが、26インチより長い銃身は使用できないのかと質問があり、柏木常務理事より、タイ大会ではトラップ銃を皆、使用していたので問題ないと説明。

事務局より、競技ルールを確認後、誤りであれば修正する旨を説明。

夏樹副会長より質問。

COMPAKを日本でやれる射場があるのだろうか。肝心なことだ。

不老議長より説明。

警察庁よりまだ許可が下りていないが、大きく分けて2つある。

1つは、現行射撃場内で実施できる競技、それからフィールド・原野で実施する競技。フィールドで実施する方はまず警察庁が許可しない。現在、警察庁へお願いしているものは現行射撃場で実施できるものだ。

柏木常務理事より補足説明。

今回、タイで行われたアジアチャンピオンシップで「SPORTING」はフィールドで歩きながら行うものでこれは日本ではまず許可にならない。現在警察庁へ請願している「COMPAK」でも大会実施に射面が8面必要だった。2日間200個撃ちで、1日100発。1日で選手個々が4面渡り歩きで、それを2日競技で実施。従って、世界大会を日本で実施することは難しい。

渡辺競技委員長より補足説明。

世界大会を日本で実施することは難しいが、アジアの大会へ日本選手が参加してほしいという要望は強い。

日本としては、選手やレフェリーを派遣する国際大会へ派遣することを主として取組めば良い。今後の方針は理事会で審議・検討していきたい。

議長より説明。

課題山積だが、COMPAKの日本導入は大日本猟友会と当協会が提携し一緒に活動しようと考えているので、大日本猟友会と情報を共有しながら進めていきたい。大日本猟友会も、独自にCOMPAKについて警察庁と意見交換していると伺っている。

ISSF総会にてシンガポール協会の会長とも面談できた。今後、大日本猟友会佐々木会長と私でシンガポールへ視察に赴きたい。

#### ◇予選会を含む選手強化について

小高理事より質問。

初歩的なことで申し訳ないが、クレイ射撃の代表選考や国際大会に参加する際の参加標準記録は設けていないのか。

前回理事会で日本ランキングの議題があったが、世界ランキングや日本ランキングは選手選考に関係無いのか。

梅津強化委員長より説明。

世界大会で決勝に残るためには120/125点以上記録しないとダメ。門戸を広げるために国内で予選会を実施し、上位3名を派遣する方法であれば特に基準点は無いことになる。

日本ランキングは未だ始めたばかりで選手選考には反映されていない。来年4月から年度が変わるため、強化委員会としては公平性の下で予選を行う必要があると考えている。

岩尾理事より意見。

不老会長が現役の時代は、オリンピックも世界選手権も全て男女混合だった。現在はミックス種目はあるが男子・女子種目が区分されているため、基準点を精査する必要がある。予選会は混合で実施するのは構わないが、派遣対象種目や当該種目の基準点はしっかり議論する必要がある。

菊本理事より意見。

不老会長や梅津委員長の現役時代は、最低でも週に3~4回は射撃場で練習したのだが、現在、そのような選手は皆無である。クレー代・装弾代など費用面は借金してでも捻出できるが、要はそれだけの練習時間を作れない。現在、戸口選手が大会や強化練習に参加しているが、彼の場合は、学校や両親の理解があって成り立っている選手。

50~60歳代の選手であれば費用や時間を作れる選手が居るが、それでは将来性を見据えた選手強化はできない。強化委員長としてもそこが一番の悩みどころであろう。

議長より説明。

人材の確保が課題であることは理解した。

議長より、以上で報告事項、議案審議の総てが終了したことを告げ、閉会挨拶と出席各位への慎重審議に対する謝辞があり、閉会を宣した。

なお、次回の理事会は2023年2月6日、次々回の理事会は3月30日、双方ともスクエア会議室で行うことを申し合せた。

15時30分 閉会

2022年12月6日

一般社団法人 日本クレール射撃協会

議

長

不老 安正  
(会長 不老 安正 自筆署名)



議事録署名人

相馬 正  
(監事 相馬 正 自筆署名)



議事録署名人

瀧根 隆幸  
(監事 瀧根 隆幸 自筆署名)



議事録署名人

藤沼 弘文  
(監事 藤沼 弘文 自筆署名)

